

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730660

研究課題名(和文)沖縄地方のリスク層の若者の移行状況に関する聞き取り調査

研究課題名(英文)Research on the transition of the risks of the Okinawa young

研究代表者

上間 陽子 (UEMA, Yoko)

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：90381194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はこれまで焦点の当てられることのなかった、地方在住のリスクを抱える若者の移行過程の聞き取り調査である。調査において特に注目したのは、これまでの移行調査では扱われることのなかった暴力や性的問題である。暴力や性的問題は、当事者との合意が形成しづらく、バッシングに転化しやすいことからこれまで記述されることがなかった。本調査研究では、そうした問題が起こるのかを、かれらの資源の枯渇状況を描くとともに、当事者の合意を経ながら記述をすすめることで、貧困研究においてえがかれることのなかった、暴力や性的問題を記述することができた。

研究成果の概要(英文)：This research is composed of interviews with the young living in local communities in Okinawa for investigating the process of the transition of their risks of working in the sex industry, which so far any study has not raised. This study focuses particularly on the problems of violence and sex with which any research on the process of the transition noted above so far has not dealt. There are two reasons for this carelessness concerning the difficulties: first, it is difficult to involve the persons concerned in such research; second, any study of tackling those problems can receive some negative criticism. This research, on the whole, succeeded in describing violence and sexual problems which have not been tackled in the field of research on poverty by shining a light on some reasons why such problems occur, writing the causes by way of explaining no resource for finding solutions to the difficulties in them and working together with the persons concerned.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：社会教育

キーワード：リスク層 沖縄 若者 性産業 暴力 リスク 性

## 1. 研究開始当初の背景

社会、産業構造、雇用構造の変化を受け、先進諸国の若年者の学校から就労への移行は、長期化・複雑化・不安定化していることが指摘され、若者が層として貧困に陥るといふ現象が生じるようになった。こうしたなかで沖縄地方は、10代、20代のコーホートの若年失業率の高さや低所得などの困難が指摘される一方、雇用がないにも関わらず沖縄に戻る人口還流現象があると指摘されてきた。若者に仕事がないにも関わらず、沖縄に戻ってくるのは、沖縄には手厚い相互扶助的ネットワークが一定程度存在し、雇用問題が逼迫するのを防いでいるとされてきたが、その一方で、保護施設に育つ若者のルポや実態調査からは、沖縄においてもとりわけリスク層の若者の社会関係資本が脆弱なこと、本来“あるとされる”相互扶助的ネットワークとして機能するとされる親戚・家族といったネットワークからそもそも除外されていることが明らかにされてもいる。まずこうした指摘に示唆を受けつつ、沖縄地方のリスク層の若者の移行状況の実態を追うことがなされる必要があるというのが、本研究開始当初の社会状況であった。

## 2. 研究の目的

こうした状況をふまえ、本研究は、特に移行の困難を抱える沖縄地方の中卒者・高校中退者の若者の移行過程を追うことを目的としているが、リスクを抱えやすい若者を対象とすることから、研究の方法を下記のように変更し実施することで、先行研究が明らかにしづらかった若者を追跡することにした。

## 3. 研究の方法

移行プロセスを追うという研究目的のために、本研究では半構造化インタビューをベースとしながら聞き取りを進めている。しかしながら調査対象者が特に捕捉が難しいリスクを多く抱えた若者である、という点から、次のような工夫をすることで捕捉率が上昇するようにつとめた。

1) 研究開始当初の背景でも述べたように、リスク層の若者の捕捉の難しさを踏まえ、本調査では、同一対象者に対して頻繁にコミットすることをベースとした。方法は、メール、SNS、電話などの方法や、あるいは、頻繁な聞き取り調査の実施ということによって、常に連絡が取れる状態をつくった。

2) もう一点は、インタビュー実施の場所やインタビューの時間の設定をかなり柔軟にした点である。多くのインタビューが、かれらの仕事が終了する真夜中や朝方の実施となっており、インタビュー実施場所も移動する車内、働いている店内といったかれらの生活空間となっている。これはかれらの話しやすさに焦点を当てたことによってなされたが、これによって生活圈そのものへの参入や移動可能空間の感覚などが把握できた。

## 4. 研究成果

まず、調査対象となった若者は調査地点において、キャバクラ嬢、風俗嬢、キャバクラ店長、風俗店店長、建築業従事者、彫師であったが、それは決して安定しているのではなく、2年の調査の間に失業や違法就労を行き来しながら生活をしていることがわかった。また暴力と性の問題は、かれらの職業生活や家族形成プロセスにおいて織り込まれるように生起しており、こうした局面をどう乗り越えていくかということは、かれらの生活において主題となるものであった。こうした問題が頻繁におこるために、仕事をやめて地域を移動し、あるいは仕事のみを突然やめて(「とぶ」と表現される)などがあったほか、妊娠にともない仕事をやめる・妊娠にともない相対的に安全なキャバクラ店に移動するなどの対処方法もみられた。こうした状況に関わらず捕捉が可能になったのはひとつには3で述べたような方法論上の工夫があったからだと思う。なおリスク層の若者の12名に対してインタビューを実施しているが、8名の若者を調査終了の2年目においても捕捉しているため今後もかれらの仕事・家族形成過程の調査を継続することが可能となっている。

ここでは彼女たちが働くキャバクラ店について、そして沖縄のキャバクラ店事情について確認しておく。まずキャバクラ店とは、ドレスなどで着飾った女性スタッフが男性客の隣に座って、飲酒をともなう接待を行う風俗営業店であり、性的接触は禁止されている。店の外には客を店まで呼び込む「キャッチ」と呼ばれる男性が働いており、店の中には「キャバ嬢」とよばれる接客をする女性たちと、飲み物等運び、客から料金の受け取りを行っている「ボーイ(あるいはメンバー)」と呼ばれる男性が働いている。ボーイは店内の仕事だけではなく、仕事終了時にはお酒を飲んだキャバ嬢を自宅まで送り届け、出勤時には自宅に迎えに行く送迎も担当している。キャバ嬢たちは、客の隣の席に座り、水割りを作ったり、客の話の相手をする。したがってそこで働く女性には、ドレスを着こなせるだけの容姿と、「トーク」とよばれるおしゃべりをしながら客との応対ができる会話術が必要とされる。

とはいえ、同じキャバクラ店でも営業場所、客層(客の年齢や所得の傾向)、料金設定などにより女性の働き方は異なる。若年女性の継続調査を行う杉田真衣は、キャバクラ店を「大衆店」「中級店」「高級店」と区分する(杉田 2013: 140)。沖縄においても、働く女性たちには、店の雰囲気とそれに連動する地域ごとの差異は強く意識されているように思われた。

とはいえ、男性側に目を向けてみるとこうした一般的なキャバクラ店の情報を頼りに「飛び込み」で店に行く者は少ないように思

われる。彼らは地元の知り合いのボーイに連絡を取り、女性スタッフの容姿（顔の系統、胸のサイズ）や、性的接触の許容度などを事前に確認し、時間や料金、接待する女性の数を交渉して入店する。また再度入店するときは、しかしして（＝ナンパして）反応のよかった女性のいる店を選択する。こうした事情があるため、本来であればボーイは、「おさわり」をする男性客をチェックし、場合によっては退店させるなどの処置をとることになっているが、事実上それができなくなってしまう。キャバ嬢の仕事においてとりわけ「トーク」が重要となっているのは、こうした性や暴力の溢れる店において「トーク」によって、男性客を不機嫌にさせずに、かつおさわりをかわすことが可能となるためである。

女性たちの勤務体制や給料についてみていく。店によって違いはあるが、勤務は、深夜 10 時から 11 時前後から始まり、朝の 5 時から 6 時前後に終わる。この仕事を始めた理由として、まずほとんどの女性があげるのが、2,000 円前後の時給が「割がいい」という点である。話を聞かせてもらった女性のなかには、コールセンターの受付、地域の居酒屋、ホテルの清掃業、地元のスーパーでパートをしていた人などもいたが、それらの仕事は時給に換算すると 700 円以下（居酒屋が例外で 850 円から 1,000 円）となっており、それと比べるとキャバクラ店の仕事は確かに「割がいい」ものだといえる。とはいえ送迎代を天引きする店もあるし、メイクや髪の毛のセット代は自腹で払わなくてはならない店もあるし、客の入りが少ない日には、早々と店を閉めてしまいそのぶん給料が減ってしまう店もある。つまり毎晩きちんと約束したとおりの日払いの給料が支給されるわけではなく、実際にはそれほど「割がいい」仕事であるとは言えない側面もある。

これに加えて彼女たちのうちの何人かが述べていたのは、そもそも仕事を探す際に制約があり、この仕事しか選べなかったという理由である。たとえば数名の女性は、ひとりで子どもを養育しながら全ての生活費を稼がなくてはならないため、仕事は「必然的に“夜”しかない」と述べている。またある女性は、あるきっかけで刺青をいれたことから、刺青に比較的寛大な仕事しか選択できなくなったと述べている。またなかには、他の仕事を選ぼうにも、中学卒業以来ずっと「“夜の仕事”以外したことがない」と、他の仕事を選ぶことが難しい事情について語っていた女性もいる。だがキャバクラ店で働くことは「割がいい」と述べた女性も、何らかの制約ゆえにその仕事を選ばざるをえないと述べた女性も、実は継続的にキャバクラ店で働くことを希望しているわけではない。「仕事を辞めたい」「（お金を貯めて）辞めるためにいま頑張っている」「1 日でも早く辞めたい」などのように、「仕事を辞めたい」という言葉はよく聞かれる。これらの言葉を理解する

ために、沖縄で働くキャバ嬢にとっての地元のもつ意味に目を向けよう。

キャバクラ店で働く女性たちは、店で働く際に実生活の自分と仕事の自分の境界線を引くために、「源氏名」と呼ばれる仮名を使っていることが指摘されている（杉田：2013）。だがその人の出身中学校と何期生かによって、実名がほとんどわかってしまう沖縄では、「源氏名」を使って仕事をしている女性は少ない。ただし彼女たちが仕事場で実名を使っているからといって、自分の出身地である地元に通っていることを知れ渡ることをよしとしているわけではない。多くの女性が仕事を始めるときは、まず地元から遠く離れた繁華街のお店で仕事をスタートし、それから徐々に地元の客がやってこない、かつ通勤にあまり時間のかからない場所へ移動する形で店に定着する。もちろんそのことによって、地元の人に知られることを「完全に」避けることができるわけではない。だが地元から離れることによって、知り合いが店にやってくることを回避できるし、もし知り合いが店にやってくる場合でも、どのキャバ嬢がどの席について話をするのかという「つけまわし」を決定するボーイに、その席に配置しないように頼むことができるのだという。

そのようにして注意深く地元と距離が取られる理由は、地元からのまなざしに彼女たちが常にさらされているからである。ある女性は、「（地元で）自分から積極的に“夜”っていうことはない。偏見とかあるから」と語り、またある女性は、「地元がとにかく嫌い」という。それは、自分がいつどこでだれと一緒にいたなどの情報が、地元の男性社会の情報網で噂になって知れ渡るからだという。さらにインターネットの沖縄のサイトでは、どの店にどのような女性が勤めているかなどの風俗業界の情報とともに、自分の地元の仲間や自分がどの女性と性体験を持ったのが暴露されたり、STD（＝性感染症）にかかっている女性の名前が暴露されたりしている。またある女性は同じ地域出身と思われる人からインターネット上に「パーキー」（沖縄地方の方言で、直訳すると「ざる」。何でも入れることから、誰とでもセックスをする女性をこのように表現する）と書かれたこともあるのだという。地元の関係は、女性たちの性体験を監視し、それに対して否定的サンクションを与える機能を持つ。女性たちはこのように地元の男性社会にさらされながら仕事をしている。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

上間陽子「小学校教師、船浮民生先生の実践分析」『琉球大学教育学部紀要』第 83 集、2013 年、139 頁 149 頁、査読無。

打越正行「建築業から風俗営業へ 沖縄のある若者の生活史と 地元 つながり」日本解放社会学会編『解放社会学研究』26号、2013年、35頁 - 58頁、査読有。

打越正行「沖縄的共同体の外部」龍谷大学人権問題研究会編『沖縄における階層格差と人権 中間報告書』、2013年、15頁 - 34頁、査読無。

上間陽子・打越正行「沖縄地方におけるジェンダー格差」『子ども白書』、日本子どもを守る会編、草土文化、2012年、159 - 160頁、査読無。

打越正行、「オキナワン・ヤンキー・サブカルチャーズ 日本 と沖縄の暴走族の組織原理に注目して」社会理論・動態研究所編『理論と動態』、5巻、2012年、112頁 - 128頁、査読有。

〔学会発表〕(計 1件)

上間陽子・打越正行「キャバ嬢になること - 沖縄 <夜シゴト> で働く女性たち」日本教育社会学会第65回大会、2013年、査読無。

〔図書〕(計 1件)

上間陽子「性と暴力に抗う『親密圏』 - 沖縄・キャバクラで働く若年女性たちのケースから」教育科学研究会編『講座4巻 地域・労働・貧困と教育』かもがわ出版、2014年、査読無。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上間陽子 (Yoko UEMA)

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：90381194

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

打越正行 (Masayuki UTIKOSHI)

社会理論・動態研究所・研究員

研究者番号：30601801